

高等学校におけるキャリア教育の意義に関する考察

—進路多様校のデュアルシステムを事例として—

小 川 須美江

(発達教育学研究科博士後期課程)

1. 問題の所在

高等学校におけるキャリア教育は、普通科が抱えている課題が専門学科や総合学科と比較してより深刻であるとの認識から、主として普通科における教育課程改革に関わる重要なテーマの一つとして議論の対象とされてきた。具体的には、まず2006年に「高等学校におけるキャリア教育の推進に関する調査研究協力者会議」が、その報告書『普通科におけるキャリア教育の推進』において、普通科における従来の進路指導が上級学校への進学指導に偏り、それ以外の生徒に対する指導、すなわち学校と社会との接続に関係する指導を重視してこなかったことの問題点を指摘するとともに、生徒の具体的な進路に関わらず、将来の生き方に関する問題を考えさせるためのキャリア教育を推進することの重要性を提起している¹⁾。また、2014年の中央教育審議会初等中等教育分科会高等学校教育部会における審議のまとめ『高校教育の質の確保・向上に向けて』では、中学校卒業後の生徒の高等学校等への進学率の上昇に伴って、生徒や学校・学科等が多様化してきたことにより、本来あるべき高校教育としての「教育の質」に対する信頼が揺らいできていることを報告している²⁾。高校教育については、「生徒の幅広い学習ニーズに柔軟に応えることが可能となった」ものの、高等学校の実態が多様化する中で、高等学校というものを一括りに語ることが次第に難しくなっていると指摘している。一部の高等学校においては、小・中学校での学習内容を十分に身につけていない者も少なからず見られるなど、学び直しへのニーズが非常に高まってい

る。特に大学進学を目指す生徒の比率が低い「進路多様校」と呼ばれる高等学校は、生徒の就学継続や進路実現において、生徒指導上に困難を抱えることが多い。自分に対する向き合い方に自信を持つことができず、自らの将来に向けて展望を描くことに対して積極的に取り組むことを苦手とする生徒が多いと言われている。経済的な理由による中退も珍しくない上に、卒業できたとしても、正規雇用ではなく非正規雇用としての道を歩むことになる場合が少なくない。このような厳しい状況におかれている高等学校において、将来の社会的・職業的自立に向けた資質・能力の育成や、職業に従事するために必要な資質・能力を習得させることが大きな課題となっているのである。

以上のような議論を経て、文部科学省は、2020年7月に中央教育審議会・初等中等教育分科会「新しい時代の初等中等教育の在り方特別部会」において、高等学校の普通科を3つに再編する案を示し、10月にその改革案を提出した。この「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」と題する中間まとめの中で、普通科改革として、「普通教育を主とする学科」の弾力化・大綱化が提起され、普通科以外の学科の新設が可能となった。高校生の約7割が普通科に通う現状において、普通科の特色化・魅力化を促進する観点から検討されたのである。具体的には、「学際科学的な学びに関する学科」(SDGs等に関わる現代的な課題への対応に取り組む)、「地域社会が抱える課題の解決に向けた学びに関する学科」(地域社会における諸問題の解決に取り組む)、「その他、特色・魅力ある学科」等を、

各設置者の判断により認めることとしている。さらに、この改革案では、学科の新設に伴い、学外組織との関りを深めることも求めており、地域社会や大学等の高等教育機関との連携、また企業等の関係機関との連携・協働体制も構築することが必要であると提言している³⁾。

以上のように、高等学校の普通科における教育課程の改革については、これまで様々な議論が展開されてきたが、それら議論の根底にある課題は大きく変わっていないように思われる。つまり、大学進学という目標に特化した画一的な学習に偏りがちな教育内容への反省と、特色ある教育の多様化を推進することである。そこで本稿では、このような課題に地域とともに取り組み、学校全体で教育課程の改革に果敢に挑戦してきた高等学校の事例研究に基づき、高等学校の普通科においてキャリア教育を推進することの意義について具体的に検討してみたい。本稿が事例として取り上げる高等学校は、筆者が2014年に現地調査を実施した大阪府立の「進路多様校」である。「学校」と「実社会」という2つの学びの場を融合したキャリア教育実践の特徴を検討するとともに、そのような実践を通じて生徒に生じた意識の変化を分析することによって、高等学校の普通科（特に進路多様校）におけるキャリア教育の意義について、多面的に考察を加えたい。

2. 研究の背景

(1) 高等学校におけるキャリア教育に関する先行研究

本論に入る前に、高等学校の普通科におけるキャリア教育に関する主要な3つの先行研究について概観しておきたい。まず辰巳（2010）は、高校の個性化・多様化政策において、キャリア教育が生徒のニーズや課題に応じて展開される可能性について検証している。実践的な課題の視点からキャリア教育の目的と進め方についての差異を検討し、その結果、進学率の低い下位校では基礎的な社会性の向上が目的とされていることを明らかにした。一方で、進め方については、進学率の高い上位校においては「興味・

関心」と「進路決定」が分離された状態でキャリア教育が展開されており、下位校では「興味・関心」と既存の進路指導と生徒指導を融合した展開が見られることを確認している。また、児美川（2013）は、「教育困難校」と称される大阪府内の3高校でのインタビュー調査に基づき、それぞれの学校のカリキュラムの違いに着目しつつ、教育困難の様相とその背景やキャリア支援上の諸問題を実態的に明らかにすることを目的としている。加えて、同年に、NPO等にヒアリング調査を行い、高校の「進路多様校」における生徒の社会的自立支援・就労支援への取り組みの実態を把握するための調査も行っている。このように、高校の多様化に伴い、各学校の特性や地域性に見合ったキャリア教育の内容や方法が構築され、展開されていくことが必要であると思われる。

(2) 近年の動向—日本版デュアルシステムの導入と展開

「日本版デュアルシステム」導入の背景には、日本における若年者の就労問題の深刻さが根底にある。若者の将来への展望を奪うことは、日本社会も活力を失うことになり、社会保障制度を初めとする社会のさまざまなシステムを根幹から揺るがしかねない。そこで、ドイツにおける職業教育として知られる「デュアルシステム（学校での教育と企業での教育・訓練（実習）とを併せて行う）」の考え方を日本に導入し、「日本版デュアルシステム（実務・教育連結型人材育成システム）」として、専門高校等の学校教育に位置づけられることとなった。

この「日本版デュアルシステム」については、2003年6月の「若者自立・挑戦プラン」において、「キャリア教育、職業体験等の推進」とともに「日本版デュアルシステムの導入、基礎から実践にわたる能力向上機会の提供」などが具体的政策としてまとめられた⁴⁾。そして2004年2月に出された「専門高校等における「日本版デュアルシステム」に関する調査研究協力者会議報告書」では、その内容を詳しく見ることができる。つまり、このシステムは産業教育の中

核である専門高校等において、今後大いに導入が図られるべきであり、高度の専門的な知識や技術・技能を有する人材（スペシャリスト）の基礎を培う教育、地域と産業界が連携した教育の充実と強化が求められる。そして、チャレンジ精神・創造性・問題解決能力といった「起業家精神」を生み出す資質や能力を育む教育の重要性が社会的にも高まりつつあることから、専門高校等のカリキュラムに「日本版デュアルシステム」を導入することは大いに促進されるべきであるとの考え方が示されているのである。加えて、このシステムを定着させるためには、先に述べたように、主体となる実習を有意義なものとして認識される必要がある。すなわち、「産業界と専門高校等とが連携をとりながら、双方にとってメリットがあるように協同で人材を育成する教育システムを構築すること」が重要であり、これが専門高校等における「日本版デュアルシステム」のあるべき姿であると説明している⁵⁾。

このような新教育システムである「日本版デュアルシステム」への効果的な導入方法を探ることを目的として、2004年度から実施された「専門高校等における『日本版デュアルシステム』推進事業」には、20地域25校（2005年度時点）の専門高校等が選定された。このモデル事業は2007年度に終了したが、施策の効果として、実施にあたっての環境整備等の課題はあるものの、日本版デュアルシステムは有効な教育手法であることが示されている。ここ数年の間においても、デュアルシステムを導入する高等学校は工業高校を中心に徐々に増えており、例えば東京都では、都立葛西工業高等学校及び都立多摩工業高等学校が、ともに2018年度より「デュアルシステム科」を設置している。また岐阜県においても、県立山県高等学校が、2019年度より普通科の工業コースにおいて、県内初となるデュアルシステムを導入するに至っている。以上のようなことからわかるように、デュアルシステムの効果的な導入や普及が、専門高校等における教育の質の向上につながり、若者の雇用問題解決への道筋となって定着していくこと

に期待が寄せられているのである。

3. 研究の目的

日本版デュアルシステムを早くから導入し、先進的なキャリア教育の取り組みを推進してきた大阪府立A高等学校・普通科の「デュアルシステム」の事例を通して、進路多様校におけるキャリア教育について検討することを目的とする。さらに、現地調査の結果を踏まえ考察を加える。

4. 研究の方法

(1) 調査期間

現地調査の期間は、2014年5～11月の約半年間である。

(2) 調査内容

キャリア教育担当者（A高等学校教員）を対象とする面接調査や年に1回開催される職場体験実習の成果発表会「デュアル実習発表会」（全学年参加、2、3年生により発表）における参与観察を行うとともに、職場体験実習終了後に作成された生徒（3年生18名：男子10名、女子8名）の感想文集の記述内容について、KH Coderによるテキストマイニングソフトを用いて、その特徴に関する分析を行った。

5. 結果と考察

(1) 調査対象校の概要

現地調査の対象とした大阪府立A高等学校（以下、「A高校」と記す）は、大阪市の東に位置する人口約50万人を抱えるB市にある。本校の所在地は、全国でも有数の中小企業の町として知られ、高い技術力を持つ工場集積地のほぼ中央にある。最寄り駅からは徒歩約10分で、1978年創立の比較的新しい高等学校である。A高校は、設立当時は普通科高校として開校したが、その後の学校改革を経て、2017年4月からはエンパワメントスクール（総合学科）として始動し、現在に至っている。

(2) 「学校再生」と「デュアルシステム」

A高校の学校改革において、転機となった「学校再生」に至る過程と、現在の学校を形づくる基盤ともなった「デュアルシステム」の導入について見ていく。

設立当初のA高校は、卒業後の進路において、地元中小企業からの求人もあり順調であったが、2000年前後には入学者募集にも困難を抱えるようになり、地域では荒れた学校として評判になっていた。地元からの「通学途中の生徒の様子は、本当に酷いものだった」という声や、またA高校に通っている生徒やその保護者も「A高校に通っているなんてとても言えない」というような状況で、中退者も多くそのほとんどが1年生で辞めていくという事態を引き起こしていた。

A高校のデュアルシステム導入の背景には、生徒の家庭環境や経済状況等の理由による中途退学者や卒業時における進路未決定者が多く占める状況や、家庭において子どもを育てる教育環境が非常に厳しいことが、刹那的に生きてしまう生徒たちをつくってしまう状況があった。このような生活環境の中で、「自分のことを大切に思い、自信を持つ」という意味において自尊感情を育てることは、学校づくりにとっての焦眉の課題であり、必要な対策であった。また学校には、もう一方に在る生徒たちの「小中学校では、元気になれず、存在感が薄く、自分に自信が持てない」という問題もあり、彼らを輝かすためにも「自尊感情を育てる」様々な取り組みが必要とされたのである⁶⁾。その後、A高校は学校再生に向けての大きな転換をむかえることになるが、それは2つの挑戦に見ることができる。1つは、地元密着型の学校づくりである。例えば、地域住民や地元企業の関係者を招いて「学校の将来像を考えるフォーラム」を開催したこと等である。もう1つは、キャリア教育の推進である。文部科学省の「日本版デュアルシステム」研究指定校（2004～2006年度）に応募し認定されたことにより、これが契機となって、地元密着型の学校づくりが本格的に具体化し、「学校再生」に向けた抜本的な改革へ

と動き出したのである。A高校は、学校再生をキャリア教育と関連づけることによって、「日本版デュアルシステム」による「学校」と「実社会」という2つの学びの場を融合させた。学校における授業と社会での体験を通して融合的な学習を展開していくというものである。このようなキャリア教育の取り組みが評価され、2013年度には、普通科高校としては唯一の「デュアル総合学科」を設置した高校として全国から注目されることとなったのである⁷⁾。一時期は、課題集中校として問題視されていたA高校は、のちに「見違えるほど良くなった」との評判が上がるまでになったが、それは学校と地域とのゆるぎない協働連携体制によるものであった。前述のように、現在、A高校はエンパワメントスクール（総合学科）として再出発をしているが、当時の普通科におけるデュアルシステムによるキャリア教育は、当校の特色ある取り組みとして継承され発展していることを付け加えておきたい。

(3) デュアル総合学科の学習内容

上述のように、A高校は2004～2006年度の3年間、文部科学省による「日本版デュアルシステム」の研究指定校となったが、その後、A高校の取り組みが広く認められ、これらの教育実践における実績があることから、2006年度に「デュアルシステム専門コース」の設置へと至り、2013年度には、新たに「デュアル総合学科」（80名）が設置された。

ここでは、当学科の中心をなす「ほんまもん」に触れる実習⁸⁾（週1日の事業所での労働）に焦点をあて、A高校が取り組むキャリア教育の実態とその意義について考える。表1は、デュアル総合学科における主な授業内容である。社会での体験と学校での授業に加えて、高大連携による大学での体験授業、また、行事や講演会等のさまざまなイベントを通して生徒のキャリア形成を促進するものである。

a) 社会での体験と学校での授業

社会での体験は、2、3年生を対象に行われ

表1 デュアル総合学科における主な内容

社会での体験	デュアル実習Ⅰ（2年） デュアル実習Ⅱ（3年）	週1日、1年間を通しての実習 〈幅広い分野での体験〉 ・ものづくり ・子ども文化 ・介護福祉（看護）・販売ビジネス ・その他（商品管理・サービス業）
学校での授業	キャリア基礎（1年） デュアル基礎（2年） デュアル演習（3年）	・基礎学力とビジネスマナー ・実習の振り返りと体験の共有 ・課題解決と課題設定 ・コミュニケーション力 ・プレゼンテーション力
大学での体験授業	文書デザイン（3年）	・広報活動などの文書作成に関する知識と技術の習得 ・ビジネス情報の表現力の育成 ・情報発信能力を養う
行事や講演会	各学年	協定書調印式、プレゼンテーション講習会、職場見学、デュアル実習発表会、地域のイベントへの参加、講演会、修了式等

表2 社会での体験（実習）の形態

配置	1事業所に1人を配置	1人で行くことにより価値が見出せる（自立心）。
期間	2年生 （前期と後期に分けて実習） 3年生（通年）	2年生は、半期で実習先を変える。 （ミス・マッチを防ぐためであるが、希望進路が定まっている場合や資格を必要とする場合は通年で行われる）
勤務時間	実働6時間 （昼休みの1時間を除く）	開始時間と終了時間は事業所に委ねる。 （事業所の業務内容に違いがあるため）
訪問	教員による事業所への訪問	実習日に1度は必ず教員が訪問する。 （事業所への挨拶と実習の進捗具合の確認）
欠勤等の連絡	無断欠勤は許可されない	やむを得ず休む場合は、学校へ連絡を入れ、実習生本人と学校の両者から事業所へ連絡する。
評価	出勤40%、実習ノート30% 事業所の評価30%	実習生は、週1日の実習で体験したことを、「デュアル実習日誌」（実習ノート）に記入する。

表3 学校での授業（実習の振り返り）の内容

形態	複数の教員が担当	実習巡回担当教員と非担当教員の両方を配置
内容	・実習の振り返り ・体験発表 ・社会人としての心得	・実習を振り返り、その報告書を作成する ・実習で体験したこと等をクラスで発表する ・話し合うことにより、伝達・報告する力が身につく （言葉遣いやマナーの育成にもつながる）
評価	定期考査は行わない	出席、提出物、授業への取り組み状況を、担当教員が評価する。

る6単位の実習である。週に1日、1年間を通して事業所（企業や施設等）で実習する。この週1回の勤務日には、生徒は学校へは行かず、自宅から直接、実習する企業・施設などに向かい、勤務終了後はそのまま帰宅するという形をとっている。一方、学校での授業は、社会での体験の振り返りを行う2単位の授業であり、実習での反省や発見を通して、次の実習に生かしてゆこうとするものである。表2は、社会での体験（実習）の形態を示したものであり、表3は、学校での授業（実習の振り返り）の内容である。

表2にあるように、実習生は1事業所に1人の配置である。これは1人で行くことにより、

他人に甘えず、自立心を育てることにもつながるという理由からである。また、実習日に1度は必ず教員が実習先を訪問するのは、実習中に何か問題が起きている場合に、直ちに対処ができるという利点もあつてのことである。さらに、体調不良等の理由で欠勤した分については、長期休暇（夏休みあるいは冬休み）を使って補習をするという徹底した実習である。事業所による評価が30%とやや低く設定されているのは、事業所側の厳しすぎや甘すぎる評価によって生じる差を考慮してのことである。

表3の学校における振り返り授業では、実習内容を共有する意味において、複数の教員が配置され担当する。実習を振り返るメリットは3

表4 実習分野別による「私の一言」

「製造」分野	協力, 工夫, 幸, 絆, 誠, 信, 気, 人, 繋, 夢
「介護・福祉」分野	優, 長, 初, 自, 成, 話, 幸福, 愛, 技術, 時, 蕾
「販売」分野	慣, 笑顔, 想, 化者, 美, 感謝, 希, 発見, 現実, 挑戦, 答
「保育・教育」分野	経験, 声, 努力, 愛, 友, 積, 視, 学, 育, 理, 自分, 笑顔, 協力, 彩, アンテナ, 深く浅く, Stay Hungry (挑戦し続けること)

つある。1点目は、皆の前で発表することによって、自分の実習を再確認・客観化し、次回の実習の課題や目標を設定していくことができる。2点目は、グループ討議やクラスでの発表を繰り返すことで、コミュニケーション力、プレゼンテーション力を身につけることができる。3点目は、自分が体験したことを他の人に分かりやすく伝達・報告する力や表現力が、挨拶や礼儀、正しい言葉遣いやマナーにもつながっていくのである。

b) 大学での体験授業と行事や講演会

大学での体験授業として、3年生を対象とした「文書デザイン」と呼ばれる2単位の授業は、新たな高大連携によるデュアルシステムといえるものである。生徒が実際に大学へ出向き、各種ソフトウェアを活用して、ビジネス情報を創造的に表現し、説得力のある文書を作成する知識と技術を習得することを目的としている。また、行事や講演会等への参加、地域との交流も盛んに行われている。協定書調印式では、生徒本人・生徒の保護者・実習先の三者が立ち会い、生徒は実習に向けての決意の言葉と思いを述べることになっている。

(4) 実習を通した生徒の学び

a) 「デュアル実習発表会」における発表内容の分析

実習の集大成として1年に1回開催される「デュアル実習発表会」において、3年生による「私の一言」がある。これは、実習を通して考えたことや感じたこと等を、一文字あるいは二文字程度の言葉にして表現するものである。実習生は実習分野別に舞台に並び、大きな紙に力強く書いた一言を掲げて読み上げることになっている。表4は、その一覧である。

これらの言葉は、生徒一人ひとりがそれぞれの分野で体験したことが印象づけられるような一言である。「製造」分野では、協力、工夫、等の、ものづくりに欠かせない協働的な言葉が並んだ。「介護・福祉」分野では、優、話、愛、時、といった、向き合う人への思いが表われている。この中の「時」という言葉は「その人にはその人なりの時（時間）があり、自分の思い通りにはならない。じっくり待つことも大切」との意味である。「販売」分野では、慣、笑顔、化者、感謝、発見、等の言葉が並んだ。「慣」は、「少しずつ仕事に慣れていく自分に対して、逆に初心を忘れないための戒め」の意味があり、「化者」（化物ではない）という面白い表現をした生徒は、「仕事を通して、自分が変わることができたから」だと説明した。「保育・教育」分野は、声、愛、友、積、視、理、笑顔、協力、アンテナ、深く浅く、Stay Hungry（挑戦し続けること）、等の、ユニークな一言が目立った。「積」は文字通り、「積み重ねが大事だが、積極性も大事」であり、「理」を選んだ生徒は、「物事には筋道が必要、小さな子どもに対してもわかるように話すことが大切」であると話し、子どもと接する難しさを説いた。「アンテナ」の意味は「子どもたちが危険に遭わないように注意する」ことで、「深く浅く」の意味は「深く考えすぎず浅く考えることも必要、場合によってはその逆もある」とのことであった。Stay Hungry（挑戦し続けること）は、渡日生の一言である。言葉の壁、生活習慣の違いなど多くの難問を抱えながらも、日本で生活していく強い意志を見ることができる。

このように、「私の一言」は短い言葉ではあるが、その言葉の持つ意味には深いものがある。生徒が実習を通して体験し感じたことをありのままに表現しているその心のうちには、彼らが

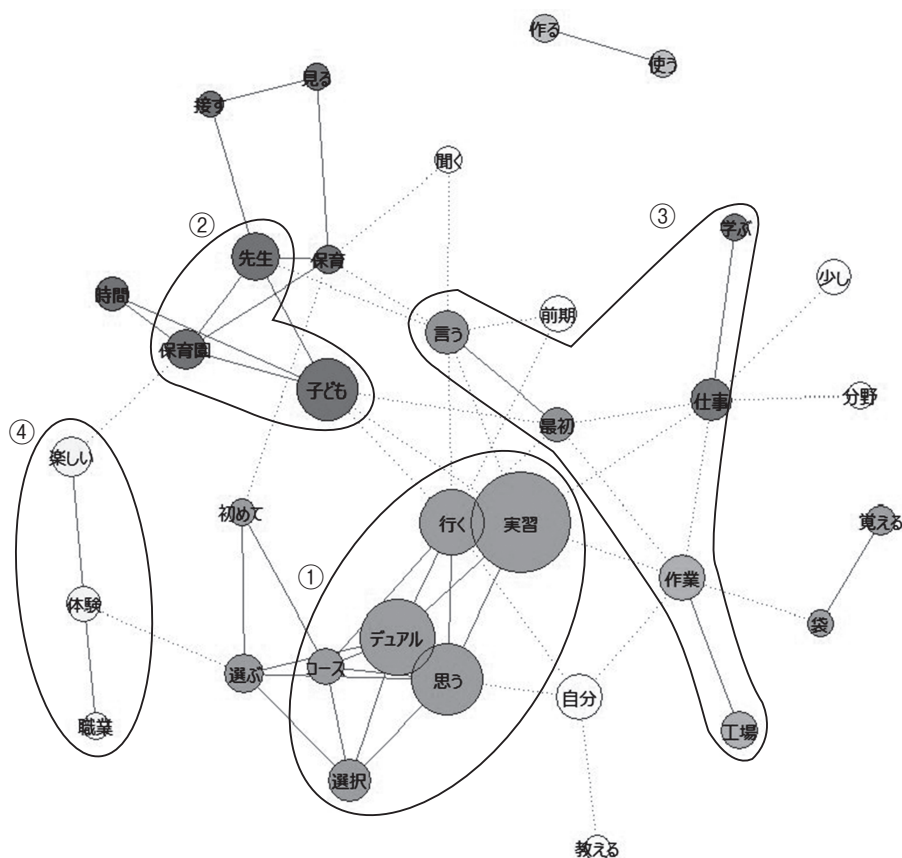


図1 感想文集の記述内容に関する共起ネットワーク

実習において考え、悩み、自分なりに何かを見出そうと懸命に努力した過程が見えてくるようである。

b) 「感想文集」における記述の内容分析

2年間にわたる「デュアル実習」を振り返り、3年生の体験発表としてまとめられた感想文集から、A高校が学校改革の目標として掲げた「トライ＆チェンジ」の精神が、実習を終えた生徒たちにどのような影響を与えたのかを分析し検討する。

ここでは、感想文集に掲載されている実習生による体験記述、3年生18名（男子10名・女子8名）をもとに、KH Coderを用いたテキストマイニングソフトによる内容分析を行った。抽出語から言葉同士の関係を探るために、共起ネットワーク⁹⁾を使用した。全記述からの総抽

出語は、696語であった。上位抽出語の出現回数は、「実習137回」「デュアル76回」「思う70回」「行く56回」「子ども50回」「先生31回」「自分29回」等である。

図1の共起ネットワークから、比較的関連性の強い抽出語群は、①「実習，行く，デュアル，思う，コース，選択」，②「子ども，先生，保育園」，③「仕事，学ぶ」・「作業，工場」・「言う，最初」，④「楽しい，体験，職業」の4つに分類されることがわかる。以下，それぞれの抽出語群の特徴を，感想文集の個々の記述に立ち戻りながら検討してみたい。

①「実習, 行く, デュアル, 思う, コース, 選択」

文集の個々の作文には「デュアルコースで社会に出た時に役に立つ様々な事柄を学ぶため」、「デュアル実習を通して、学校の勉強だけでは

学ぶことの出来ない社会勉強ができ、色々な分野の仕事を体験することができた」、「デュアル実習は辛くてしんどいことが多かったけど、社会に出ることに対してもすごく学べた」等の記述があることから、自分の将来を想像し期待を抱いて実習に臨みながらも、仕事をするものの厳しさも同時に学んでいることがわかる。

②「子ども、先生、保育園」

文集の個々の作文には「実習先の学校の先生がいつも背中を押してくれた」、「子ども達といるのがとても楽しかった」、「小さい子どもが苦手ですそれを克服したいと思った」等の記述があることから、先生からの励ましに勇気づけられたことや子どもと接する喜びが表れている一方で、実習分野の選択理由が自分の苦手克服としての挑戦であったことに注目することができる。

③「仕事、学ぶ」・「作業、工場」・「言う、最初」

文集の個々の作文には「自分から仕事を見つけることの大切さを学ぶことができた」、「作業のことを通じて色々と話しているといつの間にかコミュニケーションが取れていました」、「作業の時は、明日も行きたいと思う時もありました」等の記述があることから、仕事を通して様々なことを学び、人間関係を構築していったことがわかる。また、「最初は足を引っ張ってばかりでした」、「自分なりに、分からないところをしっかりと質問できるようになった」等、実習を始めた時の複雑な思いを吐露する生徒もいたが、実習を重ねるうちに、指示待ちではなく自分から積極的に動こうとする姿勢が見られるようになったこともわかる。

④「楽しい、体験、職業」

文集の個々の作文には「とても楽しく実習ができた」、「物づくりが楽しかった」、「職業の体験ができてよかった」等の記述があり、実習に対しての満足度が表れている。しかし、「実際行ってみると、楽しかったのですが大変なこともありました」、「実習に行くまでは楽しいことしか考えなかったけど、(中略)、大変なこともたくさんあることを学びました」等の記述もあり、否定的な捉え方ではないが、実習に対する期待度の大きさと、実際に体験することによっ

て感じる納得度が、明確に表れていて興味深い。

以上の分析により、職業体験実習を通して、生徒の精神面や感情面において意識の変化が見られることがわかった。一步踏み出すのにも躊躇をしていた生徒が、周囲の人たちからの「力強い言葉」によって背中を押され、大きな声で挨拶ができたことで、「しっかりと人と話すことができる」ようになり、また、実習先の人たちの温かさと励ましで「自信を持つことができた」のである。これらが「仕事へのやりがいや責任感を持つ大切さを学んだ」と生徒が語るに至った「学び」ではないだろうか。

6. 総括的考察と今後の課題

これまでの記述から明らかになったことは、以下の3点である。まず1点目は、A高校が、当時としては他に類を見ない「独自のデュアルシステム」を作り上げ、社会における学びとして、週1回の丸1日かけた職場体験実習を実現したことである。教育課程においても「デュアル実習」という科目を授業として位置づけ、正規の単位として修得できるようにしたのである。次いで2点目は、A高校では、デュアルシステムを単なる職業訓練ではなく「地域と連携したキャリア教育」として位置づけているところに特徴がある。社会での体験(実習)の他に、大学の学園祭や市民イベント等への参加で地域との交流を深めている。外部の人と積極的に関わることによって、長期的に人間関係を築いていくこともA高校のデュアルシステムとしての大きな意味づけとなっているのである。最後に3点目は、生徒の「自尊感情」の育成である。困難な環境に置かれている生徒が多く、自信を持つことができず、コミュニケーションも苦手な生徒のいるA高校では、生徒に自信を持たせ、学校全体を活性化するための「トライ&チェンジ」をデュアルシステムのキャッチフレーズとして学校改革の目標とした。年1回の生徒による「デュアル実習発表会」が、生徒の大きな自信につながっていることは言うまでもないが、同時に教員の自尊感情の育成にもつながっている。教員も自分たちが行っていることに対して

の社会的使命を認識することが必要なのである。しかし、一方で問題もある。前出の児美川(2013)は、デュアル総合学科の充実の裏側で普通科との「分断」が「これまで以上に固定化される」と指摘している。つまり、普通科の教育課程にこそ、職業世界で通用する専門的能力の育成が必要なのである。先に述べたように、2020年10月の中央教育審議会の初等中等教育分科会(中間まとめ)においての「高等学校の普通科を3つに再編する」改革案が、今後どこまで具体的な職業教育に鑑みた施策になるのか、その動向を見守りたい。

以上のように、本調査では、A高校独自のキャリア教育の実践を通して、進路多様校と呼ばれる高等学校の普通科が抱える問題を明らかにし、その解決策としての取り組みを把握した。また、本稿では、「学校」と「実社会」における2つの学びの場を通して、生徒の内面に生じた変化を分析し示すとともに、学校改革の目標である「トライ & チェンジ」の精神が、生徒の学びにも影響を与え浸透していったことを確認することができた。しかし、対象校がA高校のみであったことや、生徒の「自尊感情」が育まれる背景や過程においての詳細な分析には至らなかった。「自分を知ること」にもつながる自尊感情は、人間関係の構築において不可欠である。キャリア形成の観点からも、自己理解を深めるための環境整備や効果的なプログラムづくり等も必要になるだろう。これらについて、学校と地域との協働体制の在り方を視野に入れながら、今後の検討課題としたい。

註

- 1) 高等学校におけるキャリア教育の推進に関する調査研究協力者会議(2006).『普通科におけるキャリア教育の推進』2-3頁
- 2) 中央教育審議会初等中等教育分科会高等学校教育部会(2014).『高校教育の質の確保・向上に向けて』7-8頁
- 3) 中央教育審議会初等中等教育分科会『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(中間まとめ)』

2020年10月7日

- 4) 若者自立・挑戦戦略会議(2003).『若者自立・挑戦プラン』5-6頁
- 5) 専門高校等における「日本版デュアルシステム」に関する調査研究協力者会議(2004).『専門高校等における「日本版デュアルシステム」の推進に向けて—実務と教育が連結した新しい人材育成システム推進のための政策提言—』
- 6) 易 寿也(2005).「普通科高校における『日本版デュアルシステム』の取組み」,「キャリア教育と人権」研究会第4回学習会, 60-70頁
- 7) NHK 総合テレビ「かんさい熱視線」(2013年7月19日放送)や朝日新聞「教育から職業へ企業との連携どこまで」(2014年1月9日付, 朝刊)など, マスコミでも取り上げられることとなった。
- 8) 実習先の数は100を超えており地元地域の協力によって成り立っている。今後も地域の協力が欠かせない状況である。
- 9) この共起ネットワークとは, 計量テキスト分析(KH Coder)の1つのツールである。記述文書等の内容分析の際に, その記述から抽出された「語」が互いに線によって結ばれている状態から, それら「語」同士の関係性を読み解くものである。なお, それぞれの「語」を結ぶ線の種類については, 実線のほうが点線よりも強い共起関係にあることを示している。

引用文献

- 易 寿也(2005).「普通科高校における『日本版デュアルシステム』の取組み」,「キャリア教育と人権」研究会第4回学習会
- 高等学校におけるキャリア教育の推進に関する調査研究協力者会議(2006).『普通科におけるキャリア教育の推進』
- 児美川孝一郎(2013).「『教育困難校』におけるキャリア支援の現状と課題」,日本教育社会学会編『教育社会学研究』第92集(特集・教育と支援の間で)
- 児美川孝一郎(2013).「高等学校「進路多様校」におけるキャリア教育の課題についての実態調査研究」,『科学研究費助成事業研究成果報告書』専門高校等における「日本版デュアルシステム」に関する調査研究協力者会議(2004).『専門高校等における「日本版デュアルシステム」の推進に向けて—実務と教育が連結した新しい人材育成システム推進のための政策提言—』
- 辰巳哲子(2010).「生徒のニーズ別キャリア教育の展開方法の差異に関する考察」,『Works Review』Vol.5
- 中央教育審議会初等中等教育分科会高等学校教育

- 部会（2014）.『高校教育の質の確保・向上に向けて』
- 中央教育審議会初等中等教育分科会（2020）.『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（中間まとめ）』
- 若者自立・挑戦戦略会議（2003）.『若者自立・挑戦プラン』

参考文献

- 乾 彰夫・本田由紀・中村高康（2017）.『危機のなかの若者たち』東京大学出版会
- OECD 編（2009）.『世界の教育改革 3 OECD 教育政策分析』（稲川英嗣・御園生純ほか訳）明石書店
- 川合智之・宇賀田栄次（2019）.「普通科高校におけるキャリア教育に関する一考察—浜松市内高校生の地元志向への意識変化に着目して」,『静岡大学教育研究』15巻, 1-25頁
- 斉藤武雄・佐々木英一・田中喜美編（2009）.『ノンキャリア教育としての職業指導』学文社
- 橋本 祐・森山智彦・浦坂純子（2011）.「研究ノート『キャリア教育の現状に関する調査』報告」,『同志社大学学術リポジトリ 評論・社会科学』96号, 87-107頁
- 樋口耕一（2014）.『社会調査のための計量テキスト分析』,ナカニシヤ出版